

行政視察報告書

令和 8 年 5 月 19 日

西脇市議会
文教民生常任委員会

1 視察実施日
令和8年5月19日（火）

2 視察先
小野市役所 6階 第2委員会室

3 視察事項
(1) 学力向上の取組について
(2) 川島教授との協同による教育事業の経緯等
(3) おの検定について

4 参加者
文教民生常任委員会
委員長 藤原 秀樹
副委員長 藤原 哲也
委員 藤本 留実 巽 泰 森脇 久夫
吉井 敏恭 村岡 栄紀 林 晴信
事務局 岸本 仁子 岡本 将輝

5 概要
(1) 小野市内の学校について
・小学校8校、中学校4校、市立特別支援学校1校、小野市立幼稚園1校（児童生徒数約3,600人、教職員約300人）
・幼稚園は、これまでの2園を1園に統合し、令和8年4月「おの幼稚園」を開園
(2) おの夢と希望の教育の経緯
・平成9年、神戸市で児童の殺傷事件が発生し、兵庫県下でこころの教育が課題となる。
・平成16年、小野市では児童の学力低下が課題となる。
・小野市の「児童の基礎学力を育てる」という方針と、東北大学の川島隆太教授の「読み書きが脳を育てる、脳の前頭前野を鍛えることでこころの教育にもつながる」という提唱が合致したことから、平成17年10月に川島教授が教育行政顧問に就任、夢と希望の教育がスタート
(3) 川島隆太教授について
・「脳の司令塔」である「前頭前野を鍛える」ことは、「生きる力」を育み、こころの教育につながると提唱

- ・「前頭前野を鍛えると子供たちの夢は叶う」という理念の基、コミュニケーションをとる際や嫌なことを頑張るときに、どうすれば上手くできるのかと考える力が必要になることから、「おの夢と希望の教育」では、学力だけではなく、こころの教育も同時に実施できることを提唱

(4) おの夢と希望の教育・おの検定

- ・学力の向上だけではなく、こころの教育も踏まえ作成
- ・小野市教育委員会が教科書に基づき、テキストを作成し、教科書が変わる度に見直しを行う。
- ・行事等に合わせて実施し、学期に1回の受験
- ・受験は何度でも可能であり、80点以上が合格
- ・採点は小野市教育委員会が行い、間違いランキングを作成し、各学校の代表先生に傾向を伝え、授業でフィードバックを行う。

(5) 16か年教育

- ・平成17年から実施
- ・赤ちゃんがお腹に宿ったマイナス1歳から中学校3年生の15歳までの16年間で保護者に知っておいてもらいたい情報を周知する事業

所 感

藤原 秀樹

夢と希望の教育・おの検定を行政視察し、まずは脳科学に基づく教育として、前頭前野を鍛えることの重要性を学んだ。前頭前野を鍛えることで、やる気・行動調整力・感情コントロールが高まり、そのためには読み・書き・計算の繰り返しが不可欠であり、特に10歳前後で大きく伸びることを確認した。改めて、基礎的な読み書き計算を継続して行うことの重要性を実感した。

おの検定は、子どもたちの「合格したい」という気持ちをうまく活用し、基礎学力の定着や家庭学習の習慣化につながっていると感じた。私自身も子どもの頃、九九を段ごとに合格していく仕組みで自然と身についた経験があり、その原理を効果的に取り入れていると評価できる。また、子ども同士が教え合うことでコミュニケーション力も高まり、家庭学習の質と量が確保され、基礎学力の向上につながっていると感じた。

I C T教育については、教育委員会の担当者が「最低限にとどめ、極力使わない教育を行っている」と自信を持って説明されていた点が印象的であった。説明者の一貫した自信ある姿勢、配布されたパンフレットのシンプルで分かりやすい構成からは、「保護者に伝えたい」「理解してもらいたい」という強い意図が感じられた。私が委員会で求めてきた“シンプルで分かりやすい広報物”が実際に形になっており、その姿勢こそが重要だと改めて感じた。

学力向上には家庭学習が不可欠であり、予習・復習・繰り返しを習慣化し、学校・保護者・子どもが一体となって取り組む必要があると強く感じた。

今回の「おの夢と希望の教育・おの検定」の行政視察は非常に有意義であり、小野市が全国平均を上回り、北播磨でトップクラスを維持している理由を理解することができた。西脇市としても、しっかりと取組を進めていきたい。

藤原 哲也

小野市では、学力低下や心の教育への危機感から川島隆太氏を顧問に迎え、「簡単な計算や音読が前頭前野を活性化させ、自制心や協調性を育む」という脳科学の知見を軸にした教育改革を断行している。その中核をなす「おの検定」は、市教育委員会自らが採点・認定を行うことで家庭学習の習慣化と達成感を支えており、単なる詰め込みではない「心を鍛えて頭を鍛える」という独自の学習サイクルを確立した。さらに、乳幼児期から中学校卒業までを見通した「16か年教育」や地域の小中一貫教育を展開し、小学校高学年からの教科担任制や小中合同の教育研究などを通じて、子供たちの成長を社会全体で切れ目なく支える仕組みを構築している。現代の課題であるI C T活用

(G I G Aスクール構想)においても一時の流行に流されず、デジタル端末の長時間利用がもたらす弊害を科学的に捉え、最適利用時間を「30分から1時間」に設定し、コピペに頼らない対話型学習に主眼を置くなど、極めて理性的な「適正化」を徹底していた。

何より感銘を受けたのは、これら現場の変革を支える教育委員会自身の組織改革である。従来の権威主義的な定例訪問や上意下達の関係性を自ら廃止し、学校独自の自由裁量予算を創設するなど現場へ大胆に裁量権を委譲して「学校と一緒に考える伴走者」へと姿を変えている。また、市長のトップダウンのもと、福祉部局や警察出向者とも校務情報を共有するネットワークを構築し、いじめや不登校の予兆を早期に察知して家庭と連携する「先手管理」の危機管理体制は、重大事案の発生を抑え込む実効性の高いセーフティネットとして機能していた。このブレない方針は、近隣市町を下回る不登校率や圧倒的な非認知能

力の高さとして現れており、全国学力・学習状況調査でも全国平均以上の良好な水準を維持している。同時に、図表の読解や記述力の課題、中学生の将来の夢への意識、ＩＣＴ利用時間が30分未満の生徒の正答率の高さなど、データに基づく成果と次なる課題が明確になっている点も特筆に値する。小野市の現場の自主性を尊重しつつ部局を超えて連携する先進事例は、本市も取り組んでいると思うが、教育行政を発展させていく上で参考になるものであり、本市としても具体的な施策へと反映させていくべきである。

藤本 留実

今回の視察では、小野市が20年にわたり継続して取り組まれている脳科学教育について学ばせていただきました。特に印象的であったのは、学力向上のみを目的とするのではなく、「夢と希望の教育」という理念のもと、子どもたちの心や生活習慣、人との関わりまでを含めた総合的な教育を実践されていた点です。また、「16か年教育」という考え方にに基づき、妊娠期から中学校卒業までを一貫した成長過程として捉え、保護者支援も含めた取組を行われていることは、大変先進的であり、子どもの健やかな成長には家庭との連携が不可欠であることを改めて認識いたしました。さらに、小野市独自の「おの検定」においては、基礎学力の定着だけでなく、子ども同士が教え合うことで思いやりの心や自己肯定感を育む仕組みが構築されており、学力と人間力の両面を大切にされていることが伝わってまいりました。教育施策は、短期間で成果が見えるものではなく、継続した積み重ねが重要であると感じています。今回の視察を通じて得た学びを今後の委員会活動や政策提言に活かし、西脇市においても、子どもたち一人ひとりが安心して学び、夢や希望を持って成長できる教育環境づくりについて、引き続き取り組んでまいります。

巽 泰

小野市では平成16年から、川島隆太氏を教育行政顧問に迎え、脳科学の知見を取り入れた教育を推進している。その中で「おの検定」という独自の取組を実施し、漢字・計算・縄跳び・英語について教科書準拠の自作テキストを用い、学期ごとに検定を行っている。点数のみを目的とせず、合格まで何度も挑戦できる仕組みにより、「やればできる」という挑戦意欲の醸成が図られている。

今回の視察で最も印象的であったのは、数値として表れる学力以上に、その教育の結果として育まれている「子どもたちの心」の姿である。全国学力・学習状況調査において、小野市の小学6年生が「将来、誰かの役に立つ仕事がしたい」との問いに対し、肯定的回答が100%

であったという結果は、教育の本質的な成果を示すものである。基礎・基本の徹底を通じて、「努力すれば報われる」という自己有用感を育むことが、他者や社会に貢献したいという志へとつながっている点に強い意義を感じた。

本市においても、家庭を巻き込んだ学習習慣の定着や、子どもたちが「自分は社会の役に立てる」と実感できるような自己有用感を高める学びが必要なのではないだろうか。特に、小野市が実施しているような「何度でも挑戦でき、周囲がそれを認め、共に喜ぶ」学級づくりの視点は教育DXが進む中でも失ってはならない「五感を通じた教育」の根幹であると考えられる。

「夢と希望の教育」は、単なる学力向上策ではなく、子どもたちが将来の社会を支える一人としての自覚と誇りを持つための人間教育であった。地域の基盤を支える人材を育成するためにも、今回学んだ「心を育てる」視点を本市でも伝えていきたい。

森脇 久夫

小野市の学校教育における学力向上施策は、全国学力・学習状況調査の結果において全国平均を上回る成果を上げており、その取組が一定の成果につながっているものと感じました。

その大きな特徴の一つが、脳科学者として著名な東北大学の川島隆太教授を教育顧問に迎え、脳科学理論を基礎とした教育プログラムを構築している点です。教育にはさまざまな考え方がありますが、教育顧問の提起する理論に沿って市全体で統一した教育システムを構築していることが、成果につながる要因の一つであると考えます。

次に、小野市独自の教材である「おの検定」が挙げられます。これは脳科学理論に基づき、読み書きを中心とした学習によって脳を育て、基礎学力の向上を図ることを目的としています。小野市では、この取組が始まる以前に学力低下の傾向が見られたことから、市内の小中学校教員が協力して計算や音読を中心とした教材を作成し、学力向上と心の教育の両立を目指してきたとの説明を受けました。

現在、全国的な学力の把握は小学校6年生と中学校3年生を対象とした全国学力・学習状況調査によって行われています。しかし、この調査だけでは市内全体の学力の推移を継続的に把握することは困難です。その点、「おの検定」は全学年を対象として継続的に学力を測定できるため、児童生徒の学習状況を把握するうえで有効な施策であると感じました。

また、「おの検定」は家庭学習の定着も目的としており、計算や音読に保護者の協力を求める仕組みとなっています。学校での学習だけでなく、家庭での学習時間を確保することで、学習機会全体の底上げ

を図る設計となっています。共働き世帯が増加する中、市が作成した教材が家庭学習の支援ツールとして機能している点も特徴的でした。

さらに、小野市では全児童生徒にタブレット端末を配布しているものの、端末はあくまで学習を支援するツールと位置付けられており、自宅への持ち帰りは行わず、読み書きなどの基礎的な学習を重視する教育方針を採っています。この点も小野市の特色の一つであると感じました。

西脇市においても子どもたちの学力向上は重要な課題であると認識しています。そうした中で、小野市が実践している読み書きを中心とした基礎学力の定着、継続的な学力把握、さらには家庭学習時間の確保を重視する取組は、今後の施策を検討する上で参考になるものと考えます。

吉井 敏恭

平成17年10月、東北大学教授で脳科学者の川島隆太氏を小野市教育行政顧問として迎え、「脳科学と教育」を理念とする「夢と希望の教育」を20年間にわたり実施してきた。脳の司令塔である「前頭前野を鍛える」ことは「生きる力」を育み、「こころの教育につながる」と提唱されている。以来、「脳科学と教育」を理念とする「夢と希望の教育」が20年間にわたり実施されている。

特筆すべきは、

- 脳科学を基軸に学校・家庭・地域・行政が推進していく意識を共有していること
- 教育委員会、市長部局、福祉部局の連携が図られていること
- 「スマホ・タブレットでの学習は効果なし」との脳科学の知見を踏まえた市独自のGIGAスクールの取組がなされていること
(家庭へのタブレットの持ち帰りなし／デジタル教科書の導入に消極的)
- スマホ等の普及から読書離れの状況にあり、読書の充実を考えている。
- 夢と希望をかなえるポイントを「夢と希望をかなえる脳科 Short Seminar」として配信している（1回90秒程度、約70本を配信中）
- 自由裁量できる予算配分（今年度は各校35万円）がなされている
- 学校行事への来賓の参加を廃止（来賓祝辞はなし）
- 部活動の地域展開については拠点校移行を検討している。

はじまりがトップダウンの方針で行われ、全てが川島隆太教授の提唱する脳科学を主軸として、学校・家庭・地域・行政が一体となって学校教育に取り組む方向性を明確にすることで学力向上に成果を上げ

ている。教育指導部長の説明に、その自信がうかがえる。生活習慣や学習習慣まで触れているリーフレットも分かりやすく魅力的である。

村岡 栄紀

どうすれば西脇市の子どもたちの学力が向上するのか？に対しての小野市への視察でありましたが、結論から言うと、実践すれば確実に効果が出るのではないかという点が何点かありました。まず、前頭前野を健全に育てることが、子どもたちを健全に育むことにつながるということです。前頭前野の成長で「がんばる力」「学ぶ力」「集中する力」「コミュニケーションする力」「ものを覚える力」「がまんする力」「考える力」「友だちと仲良くする力」等が身につく、それによって当然、学力も向上するという考え方には、大いに共感するところであります。

具体的には「読み・書き・計算」という、誰にでもできるアナログ的な手法を、毎日継続して取り組むことを徹底すると（3時間は必要か）、前頭前野を鍛えることができるということです。ただひとつこれをするだけで、確実に学力は向上すると私は考えます。特に予習に力を入れ、国語、社会、英語などの教科書や教材を、毎日繰り返し音読し、それと並行しながら大事なところをノートに書き続ける（教科書には何も書き込まない）。算数や数学、理科は簡単な問題や計算、ポイントをしっかりと考えて、ノートに書きこむことを繰り返す予習を続けることにより、前もってほぼ授業の内容を理解して臨むことになり、本番の授業がさらにわかる。わかると授業へ臨む姿勢も積極的になり楽しい、そして、授業終了後も振り返りを楽しみながら、次の授業のためにまた予習を繰り返す。この繰り返しにより、国語力、漢字、英文読解、英文法、地理や歴史などの基礎学力がしっかりと身につく、これを継続する中で、さらに上のステップである応用力も自然と身についてくると考えます。そして、この繰り返しと並行して、読書をする習慣をしっかりと身につけることで、読解力も養うことができます。このような力をしっかりと身につけたうえで、さらに ICT教育や探究学習へとつなげるのが理想だと考えます。

小野市の視察では、様々なことを学びました。「読み・書き・計算の徹底した継続」が最大のポイントであると上記しましたが、次に大切なのは、「子どもたちが勉強を嫌にならないような仕組み・環境づくり」だと痛感しました。特に今の公立学校の義務教育は、できる子には物足りなく、かといって、苦手な子にとっても面白いものではないと聞きます。だからこそ、小野市で実践されている、苦手な子を得意な子が教え、頑張りを褒めたり、認め合うといった、結果よりもそのプロセスを重視する取組は非常に有効だと感じました。

最後に、“デジタル生活では子どもの脳は育たない”という考え方は衝撃でしたが、私も同感です。TVゲームや携帯電話（スマホ）の使用は学力向上に逆行するとともに、タブレット等によるICTの活用は、これからの時代において必要不可欠だとは思いますが、基礎学力が身に着き、定着するまでは極力使わない努力が必要だと考えます。「デジタルに頼りすぎない、携帯電話（スマホ）をできるだけ使わない仕組み・環境づくり」をどのように構築していくかが、学力向上の大きなポイントになってくると感じています。

林 晴信

小野市への視察は興味深いものだったように思う。脳科学に裏付けされた理論は説得力があるし、何よりも実績を伴っているのもとても響く。西脇市はGIGAスクール構想への取組は素晴らしいと思うが、こと学力、特に全国学力学習状況調査の平均正答率には反映できているとはいえない状況にある。とはいえ、すぐさまタブレット学習を止めたら伸びるのかという点と恐らくそうではないだろう。OECD（経済協力開発機構）が行う国際学習到達度調査（PISA）などのデータをよく見てみると、学校での学習や宿題のために、1日数時間程度「適切に」ICTを利用している生徒は、全く利用しない生徒よりも読解力や数学的リテラシーのスコアが高い傾向にあるとなっている。一方で、授業中や家庭における利用時間が長すぎたり、学習以外の目的（SNSやゲーム）での利用時間が長くなったりすると、睡眠不足や脳の疲労、学習時間の圧迫を招き、学力スコアが著しく低下することが確認されている。

川島教授の提唱されている前頭前野を鍛える学習法は、五感を使って読み書きすることにあると思う。これは私たちが学生時代に感覚的に行っていたこととも一致する。視覚、聴覚、触覚に運動を加えるような学習法である。黙読よりも音読、ノートが真っ黒になるまで書く、歩きながら読む（記憶する）、そして教え合う（質問の出し合いを含む）だった。私が大の苦手だった暗算やスピード計算、100マス計算などもそうだろう。デジタル学習にアナログ学習をプラスすることは西脇市でもやっていることだと思うが、ここに小野市のような脳科学的アプローチを加えればさらにいいのではないかと考える。

デジタルは「効率よく情報を整理する」のには最適だが、脳の神経回路を本当に太くするのは「泥臭いリアルな五感の体験」である。デジタルで効率化した時間を使って、いかに本物に触れ、声を出し、手を動かすか。このバランスが、これからの子どもたちの脳と学力を大きく伸ばす。

ICTに依存しない学力向上の取組は小野市で大変参考になったが、

次はＩＣＴを効果的に使って学力を伸ばしている事例の視察調査は必須であると思う。

さて、学習法はそれでいいとして、児童生徒と学校、さらに教育委員会との連携はどうだろうか。小野市教育委員会の話で非常に感銘を受けたのもこの部分である。非常に司令塔として機能的に働いているように感じた。つまり学校任せにしていないという点である。「小野市でも学力は低下傾向にあると感じている。そのつまづきやちょっとした変化を早く掴んで教育委員会に報告するよう校長に求めている」という発言があった。要は変化を掴んだら、教育委員会としてきちんと対策を練る体制ができているということだろう。15年以上前から、教育委員会が明確なグランドデザインを持ち、それを10年～15年スパンで『組織的・強制的』に現場に落とし込んできた自信とプライドが視察でも垣間見えたのは素晴らしいと感じた。「おの16か年教育」に見られるようなグランドデザインがしっかり描けていて、そのひとつひとつを市内全校に義務レベルのルーティンとしてシステム化するまでに至っていることは、賛否両論はあるのかもしれないが、私自身は評価できると感じている。もちろん西脇市でも行っていることだろうとは思いますが、どこまで機能的に実践的にできているのかはまた文教民生常任委員会で尋ねてみたいと考えている。

西脇市の課題でもある、家庭学習について尋ねてみたが、やはり特効薬は無いように感じた。特効薬はないが、日々の積み重ねにあるとも思う。

小野市は「やればできる意欲の向上」を掲げ、「おの検定」への挑戦を通じて家庭学習を強制的に巻き込む仕組みを作っている。親がサインをしたり、地域全体で検定を応援したりすることで、家庭の環境格差を公教育のシステム（学校・地域）が補完する構造ができているようにも感じた。西脇市ではまだ「保護者への啓発」レベルで止まっているように感じる。保護者間でも学力向上に関して相当な温度差があることは承知しているし、現場では努力しているとは思いますが、ここはシステムとして機能するような取組が必要だろうと考える。「おの検定」のようなものもそうだろうし、別の手立てが考えられるのならそれでもいい。小学6年と中学3年生だけでなく、全児童生徒と保護者、教員、学校、教育委員会が共通の目標を作り、その達成感を味わえるような取組が大事だろうと思う。

そしてそれらを実践するための環境整備を議会として、委員会として考えていきたいと思っている。さしあたっては夏以降のＰＴＡとの議会と語ろう会では「学力向上」をテーマに意見交換会を行うべきだと考える。